
妖幻抄

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖幻抄

【Nコード】

N4597M

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

これは、人であって人でないものの物語……。語られぬ歴史の裏で、確かに存在していた彼等は今もなお、人と人の間で生まれ、生き続けている。密やかに。息を潜めるように。彼等が求めるは、安寧の日々。ただ生きること、それを誰が咎められようか。過去。現在舞台にした伝奇風ファンタジー。こちらは主にシリーズ化していない作品のみを掲載して行きます（不定期更新となります）

鬼桜

もしこの世に『鬼』が存在するならば。それはきっとあの場所にいる。

あの、美しくも恐ろしい、薄紅の花の下に。

+ + +

「桜の下には屍体が埋まっているのよ」

桜にまつわる、有名な一節。

わたしの言葉を受けて、友人は皮肉めいた微笑みを浮かべる。

「だから、あんなに綺麗な花が咲くって？」

わたしはそれを横目で見ながら、澄まして缶紅茶のプルトップを開けた。

そろそろホット缶の恋しい季節だ。吹きつける風は冷たくて、日陰にいると無償に陽の光が愛しく思える。ほんの数ヶ月前までは、あんなに憎らしかった日差しが、だ。

「うーん。確かに人間なら養分いっぱいって感じもするけど……」
同じようにこちらは缶コーヒを開けつつ、そんなそら恐ろしい事を言ってくれる。

コーヒを一口啜り、友人は視線をやや上に持ち上げた。そして付け加えるように漏らす。

「それでも、一回で使いきりそうな気がするけどなあ」
視線の先、少しばかり高くなった空を背景に、網目のように枝が広がっている。

黒ずんだ木肌の、いささか優美さに欠ける枝には、すでに色付いた木の葉がぶら下がって風に揺れていた。そして。

「あら、わかんないよ？　もしかしたら使い切らないようにしてい

るかもしれないし」

そうとは思えないような、可憐な白い花が葉と一緒に揺れていた。

+ + +

西公園は、市内にいくつかあるいわゆる『桜の名所』の一つだ。都市圏に存在するくせに何故か山の上で、そこに行くにはかなりの坂道や石段を越えて行かねばならない。

不便な事この上ないが、それでも桜の盛りには多くの人で賑わう場所である。

しかし、当然ながらそういう場所は、盛りを過ぎれば人足が遠くもので、実際間近に冬の足跡が聞こえる晩秋となれば、閑古鳥が鳴くのも道理だった。

「どうだっていいんだけどね。昔の人は何だってこんな所に、しかも桜ばかり植えたんだか。せめて常緑樹だったらこれ程寒々しい光景にはならなかったでしょうに」

そんな友人の弁ももつともだ。

ほとんどが桜なので、この時期ともなれば寒々とした眺めとなる。
…でも。

「そう？ わたしは空が近くて割りと好きだけどな」

これはここに來た理由の一つだったので正直に口にする。しかし友人は呆れ顔で言ってくれた。

「それだけならもつと空に近くて、しかも樂に行ける所もあるじゃない。わざわざ、ただでさえない体力を使ってまで来るほどのもの？」

見透かされている。

確かにそろそろ体力的に少々衰えを感じつつあるので、友人の言葉は否定出来ない。

「はいはい、わたしが見たいのは空じゃないですよ」

肩を竦めてわたしは笑う。

『花見』に誘ったのはわたしの方なのだ。

「こんな時期に花見なんて言うから、てっきり植物園にでも行くのかと思ったよ。わたしは」

その言い草に、わたしは苦笑するしかない。バスで数十分の所にいつでも花が咲き溢れている場所が存在するだけに。

けれど　それでは意味がないのだ。

「何言ってるの。花見っていうのは、昔から桜を愛でる事でしようが」

秋も深まったこの季節、普通は桜など　それも花をつけた桜

などまずない。秋に花をつける品種もあるそうだが、ここにあるのはソメイヨシノか山桜ばかり。

それこそ紅葉した葉桜か、葉すら落とした黒っぽい枝くらいしか見られるはずがない。

目の前にひっそりと立つ桜、『鬼桜』以外は。

+ + +

『鬼桜』には伝説がある。それこそ、「桜の下には」^{ちなまぐさ}と変わらない位、血腥い伝説が。

曰く。

愛する姫君を自分だけのものにする為に、愛するその人自身を喰らった鬼の変わり果てた姿である、と。

+ + +

「なるほどね。その伝説もそれはそれで猟奇的だけど、だからってどうして秋に花が咲く訳？」

友人が不思議そうに尋ねてくる。確かにそう思つのも無理はない。しかし、もう少し柔らかい表現はできないものか。

わたしは苦笑して教えてやる。

「つまり、その姫君を喰らったっていうのが秋だったからなんだつて。結構、ロマンティックだと思わない？ 鬼は今でもその事を悔やんで涙を流す……」

「……桜色の？」

友人のその譬えが気に入って、わたしは頷く。

「そう……。桜色の、血の涙を」

そう言つた瞬間。不意に視界が暗転した。

+ + +

緩やかに、生温かい風が吹き抜けていく。

そう、『抜けて』いく。どうやら私の体は実体でないらしい。混乱しつつもそう認識する。

体の中を通り抜けてゆく感覚は、想像以上に気持ちのいいものはなかった。

（何？ これ……）

確かに先程まで狂い咲きした桜の下で、友人と他愛のない話をしていたはずだ。訳もわからず、傍らにいるはずの友人の姿を捜す。

（ねえ……！？）

そこに、友人の姿はなかった。いたのは。

美しい赤い着物を身に着けた若い女だ。中途半端に乱れた髪が、風を受けて怪しく蠢く。

一体、いつの時代のものか。妙に時代がかった格好だ。そればかりか、常軌を逸した雰囲気醸し出している。

理由はすぐにわかった。

目に鮮やかな赤い色。着物を彩るその真紅は、私に恐怖を与えた。風が運ぶ錆びた臭い。これは 血だ！！

立ち上がろうとしたわたしの前で、女がこちらに顔を向けた。
まるで何かを喰らったかのような朱唇がにたり、と笑う。

既視感。

わたしはこの女に会った事がある。でも…何処で？

「みいつけたあ……」

ひょっとしたら、それはまともな言葉ですらなかったのかもしれない。けれど、わたしの耳にはそう聞こえた。

コロサレル。

不意に思った。

ワタシハ、ミツカッテシマッタ。

カクレトオサネバ、ナラナカッタノニ。

女の白い手が、こちらに向かって伸ばされる。まるでスローモーションのように、それはひどくゆっくりに見えた。

指先の爪が、まるで刃物のように冷たい光を放っている。あれにかかれば、このすかすかの体はたちまち千々に引き裂かれてしまうだろう。

「妾の『鬼』。ようやっと見つけたぞ……！！」

歡喜の叫びをあげた女の齒は、すでに人のものではない。異常に発達した犬齒が目には焼き付く。

女はすぐ間近に迫っているのに、わたしの体は動かなかった。

金縛りにあったかのように、そこに釘付けされている。唯一自由な目が、女の動きを捉えているだけだ。

「そなたを喰らえば、妾は永遠に生きられるのだ！！」

『だから、「鬼」は絶滅してしまった』

女のものではない、誰かの声が何処から囁く。

『人より少しばかり、自然との関わりが深かったばかりに』

誰だろう。聞き覚えがある。

『今でこそ人は八十の齢を生きるけれど、昔はそれほど長くは生きれなかったから……』

そうだ、この声は。

女の牙が、私の喉を捕らえる！

『人は、「鬼」を喰らったのよ』

この声は、『わたし』だ……！！

そして、視界は真紅に染まった。女の勝ち誇ったような笑い声が響く。

狂ったその笑い声はやがてゆっくりと遠ざかっていった。

+ + +

「ちょっと！ どうしたの！？ ねえ！？」

「……？」

気がつくと、目前に見知った顔。

視界は再び午後の柔らかい光に包まれている。

「大丈夫？ 急に黙り込んだと思ったら、真っ青になるし……」

心配そうな声に、わたしは深い安堵のため息をつく。

これが現実。わたしの体はちゃんと風を受けとめている。

白昼夢と言うにはあまりに生々し過ぎる凄惨な幻夢。血の臭いす

ら覚えているほどだ。

「ごめん、ちよつと貧血……」

額に浮いた冷汗を拭って、わたしは微笑んでみせた。

見上げると、陽が少し傾いている。一体、どの位あの悪夢に捕われていたのだろう。

「もう…、心配させないでよね」

怒ったような言葉に安堵の響きがある。余程心配させてしまったらしい。

わたしはもう一度謝った。

「ごめん、もう、大丈夫だから」

ふと目についた地面に缶紅茶の缶が転がっていた。飲みかけで落としてしまったのだろう。乾いた地面に、紅茶の染みが広がっている。

そこに、一片の花弁が落ちた。

「…!？」

ぎくりとなる。すぐに風に攫われたその花弁に、あるべきでないものを見た気がしたのだ。

まるで血飛沫のような、真紅の。

「…ない？」

「…えっ？」

「え？ じゃない！ そろそろ帰らないかって言ってるの！ あんたの気分も悪そうだし、ね？」

「う、うん……」

心がまだあの悪夢に囚われたような感覚の中、半ば引き摺られるように、わたしはそうして帰路に着いた。

+ + +

もしこの世に『鬼』が存在するならば。それはきっとあの場所にいる。

あの、美しくも恐ろしい、薄紅の花の下に。

「……だから、今日は見逃してあげる」

「……え？ 何か言った？」

「今度はちゃんと春に来ようって言ったの。ほら、足元気をつけてまだふらふらしてる」

そう言っ、その『人』は嗤^{わら}った。

鬼桜（後書き）

これまた古い作品です。

若干手直しが入っておりますが、初稿はHP開設以前のものだった
ります。

母校には変な時期に狂い咲きする桜がありまして、それを題材に書
いたものです。

何か埋まつてるんじゃないかとか、理系学部もあつた為、何か実験
の結果ではとかもっぱらの噂でした（…）

桜襲

桜の下で交した約束。

今生で結ばれぬ時は　死して後の世でまた会いましょう。そして、その時こそは……。

桜色に包まれて私は逝く。
遠く果てしない、未来の夢を見ながら。

+ + +

愛した女の肉は、何故だか涙の味がした。
柔らかく、白く、未だ暖かな肌は、自分のしている行為を甘美なものに変える。

これは、罪か？

天に問うても、地に問うても、答えは得られないまま。
ただ、永遠に開かれる事のない双眸そうぼうが、現実を知らしめる。
『人』は、『鬼』を狩る。

その血肉を不老長寿の霊薬と信じ、同じ『人』を殺して喰らう。
彼等にとって、『鬼』は人などではないのだ。

ならば、その逆は？

この行為は罪なのか、悪なのか。こんなにも愛しいという気持ちが溢れているのに？

鬼は力の抜けた女の身体をかき抱き、その肉を食む。

死して後の世での再会を約束した恋人は、そうして自ら命を断つたのだ。その細い首筋に懐剣を突き立てて。

鬼の叫びも、涙も知らずに。

「おれは、人ではないのか……」

咀嚼^{そじやく}を止めて、鬼は絶望に満ちた呟きを漏らす。

「姫よ。貴女までも、おれを鬼だと言うのか……」

共に生きる事ではなく、死をもってでの来世の約束が、それを肯定していた。

好きだと、言ってくれた。

他の男では嫌なのだと。

それなのに　この残酷な仕打ちは何なのだろうか……？

「姫よ…おれは、人だ。人間なのだ……」

愛しい人が得られれば幸福だし、死なれば胸が引き裂かれるように痛む。

生も死も、血も涙もある。痛みも　悲しみも。

ただ常人よりも少しばかり自然に近いだけ。昔、誰でも持っていたものを、今でも保持しているだけ。

他は、人と何一つ変わらないのに。

変わってしまったのは　失ってしまったのは、『人』の方。

「来世など…そんな約束など、欲しくはなかった……」

たとえ、真実生まれ変わり、再び会える日が来るとしても。今の悲しみは癒されない。彼の欲しい幸福は決して得られない。

「貴女は、愚かだ」

腕の力を緩め、そつと優しく抱き締める。

冷たい抱擁^{ほうよう}。もう、彼の想いに応えてくれる腕はないのだ。

「来世の貴女も、おれも、…決して今と同じでないのに」

今でしか得られない幸福を捨ててまで、未来の幸福を選んだのか。今では幸福になれないと信じたのか。

…本来に来世で出会えると、幸福になれると信じたのか。

「貴女は愚かで…ひどい女だ……」

もう、涙も流れない。

鬼は、ただひたすら、その時を待った。

+ + +

「姫君！… ああ、何という事だ……！」

「鬼め、姫君の美しさに惑い、狂いおつたか……！？」

追手は、一目見るなり状況を自らにいいように解釈した。

人ならぬ化物　　鬼が、姫君を自らのものにせんとして失敗し、結果としてその手にかけたのだ、と。

その悲痛と怒りに満ちた視線に晒さらされながらも、鬼は平然と彼等の前に立っていた。そしてゆっくりと口元に笑みを浮かべる。

姫君の血潮で鮮やかに染まった口元の、その壮絶なまでの笑みに人々は怯ひるみ、息を呑んだ。

「…鬼…貴様、姫君を……！？」

血相を変えた男達を前にして、鬼は歌うように言った。

「ああ、おれが殺して、食った」

そうして姫の艶やかな黒髪を手に絡める。その目がうつとりと眇すがめられるのを、人々は恐れと共に目にした。

決して恐ろしい牙や鋭い爪を持っている訳ではないのに　　いや、そうであるからこそその畏怖であった。

「…おれが、殺したのよ……」

妖しく光る目は、何処か狂気に侵されていたが、人々は気付かない。『鬼』とは、そういう『生き物』だと認識したに過ぎなかった。（…姫、これが、おれに出来る手向けだ……）

彼が噛み切ったように見える首筋の傷。恐らく彼等はよく確かめもせず、そう判断するだろう。

鬼によって儚く生涯を終えた薄幸の姫君と、世の人は謳うだろう。政略結婚を嫌っての自害だとは、きっと思いもすまい。それどころか、鬼と姫が想い合っていたなどとは、夢にも思わないに違いな

い。

…ひどい裏切りにも似た、一方的な別れを押しつけられても、結局鬼にとっては誰よりも愛しい者だったのだ。

ふと、視界を何かが掠めた。

一片の、白い雪のような。

確かめずとも、それが桜の花弁であろう事が鬼にはわかった。この山に一本だけ、季節を問わず花をつける桜があるのだ。

かつて、鬼と姫が束の間の逢瀬を交した場所。

(…迎えに来てくれたのか、姫？)

鬼の目には、もう、周囲は見えていなかった。

まるで、そうする事が決まっていたかのように、鬼の足が動いた。誘われるように、後ろに下がる。

そして。

「…っ！！」

「待……っ！？」

遠くでそんな切羽詰った声がしたが、鬼にはもう届かない。

ちらちらと舞い落ちる花弁を追って、鬼は姫の亡骸を手放し、空中に手を差し伸べる。

そこに、誰かがいるかのように。

「…姫……」

迷子の子供が、母親を呼ぶように。愛しい人を呼んで、鬼は最後の一步を踏み出した。

まるで、芝居的一幕のように、鬼の体は飲み込まれるように闇に沈んだ。深い、深い、谷の底へ。

…来世の旅路へ。

大地に横たわった姫君の亡骸。佇む人々。そして沈黙した山。そんな情景を…一本の山桜が、ひっそりと見守っていた……。

桜襲（後書き）

『鬼桜』を書いた後に書いた作品です。『鬼桜』で触れられた伝説の裏側をイメージしたもので、時代的には平安〜鎌倉くらいを想定していました。想定していただけで、当時のそれなりに身分のある姫君が家を抜け出して山に逃げるなんてありえないと思います（笑）その辺りは歴史ものでなく完全創作ですので、目をつぶって頂けると……。

水面の現

わたしは、いつか水へと還る　。

+ + +

ふと気付くといつの間にそこにいたのか、水鱗族の少女が横に立ち、一緒に広がる湖面を見ていた。

水鱗族　　すなわち、一般的な言葉で示せば『人魚』たる彼女。白い肌と、波の色を想わせる青味がかった銀の髪、そして生き物の棲めない湖の色の瞳を持つその姿は、水辺にあって余計にこの世ならざるものに見えた。

「わたしは」

彼女が静かに口を開く。

身体の線を隠さない、白いワンピースが湖を渡る風に煽られてふわりと揺れた。

「わたしはいつか、あそこへ還るの」

淡々と紡がれる言葉。それは決意というよりも、願望の響きを有していた。

そう、彼女は知っている。

もはや、彼女が故郷へ戻る日は永遠に來ない事を。

「いつか、必ず…還る」

真蒼な瞳が、彼を映す。

その瞳は語る。それでも今は、自分はここにあるのだと。

「…行きましょう？」

白い手が持ち上がり、差し伸べられる。

彼はその手を取り、ただ頷く。彼女が望むままに。

…ばしゃん。

湖に背を向けて歩き始める。そんな彼等の背後で小さく水音が立った。

けれど彼等は振り向かなかった。彼も彼女も、黙ったまま歩く。そうする事が、別離の証。

彼女のこの国において奇異な色彩の組み合わせは、湖から遠ざかるにつれ、色を失い暗く染まる。まるで生まれ変わるように。

そう 最後の『人魚姫』は人になったのだから。

+ + +

彼に手を引かれながら、彼女は背後で鳴った水音に想いを馳せる。

(さよなら、『わたし』)

心の中で別離を告げる。

あれはきつと、もう一人の自分が立てた音。ここへと置いていく、水鱗族としての自分が立てた音。

これから自分は水のない世界に生きる。

たとえここに帰ってきたとしても、もう二度とあの水の世界には入れない。

…けれど、きつと。

(…わたしは、いつか還るわ)

死んで、魂だけの存在になって。

愛する人を失えば、自分は人として存在できない。それが掟だから。

だから……。

自分の手を握る、最愛の人の手を握り返す。自分が決めた、運命の手を。

この手が失われる時が、自分の命の終わり。

「…さよなら」

誰にも聞こえない程の声で呟く。

それが聞こえたわけではないだろうけれど、彼がふと彼女に目を向けた。その瞳に不安そうな色を見つけて、彼女は微笑んだ。

不安など感じる必要はないのだと、目で訴えて。

半身とも言えるこの場を離れ、人として生きてゆく事を決めた。

彼だけが彼女を、孤独から救ってくれた。初めて誰かを好きになり、その事が幸せだと思えた。

この手のぬくもりがある場所が、これから自分の生きる場所。そこは長く独りで生きてきたこの水辺ほど優しくはないだろう。

でも　喜びも悲しみも、二人で分かち合える。

それはありふれて、平凡な……けれど誰もが求め続ける夢。

そして、彼女は『人』になる。

それは誰も知る事のない、幸せを見つけた『人魚姫』の物

語……。

水面の現（後書き）

これも古くて、友人のHPのお祝いに描いたイラストに添えて書いた作品です。

先にイラストありきななので必要最小限でとても短いのですが、日本を舞台にした人魚姫・ハッピーエンドver.的な作品です。

タイトルは「みなものうつつ」と読みます。

これは基本的にタイトルとかネーミングに悩むわたしにしては珍しく、さくつと決まったタイトルです。

このタイトルは「水面に映ったもののように、まるでそこにあるようなのに実際には手で触れると消えてしまうような儚いもの」というイメージでつけました。

いつもこれくらいすんなり決まればいいのに…といつも思います…。

蠮螋

誰が、決めたのだろう。

命を繋ぐ為のその行為が、残酷であるのだと。

行っ者が、心を痛めないとも言っのだろうか。

哀しみに囚われないとも言っのだろうか。

だから、残酷だと？

当事者でもなければ、真実などわかつはずがないのに。

+ + +

まるで、空が燃えているかのような夕暮れだった。

高台に位置するその道から、赤く染まつた世界が一望出来る。

帰宅途中の彼は、漕いでいた自転車を止めると、しばらくその光景を眺めた。

ここまで登つてくるのは大変な労力で、そんな場所に家を建てた父親を恨む所なのだが、今日のように素晴らしい夕暮れ時に遭遇するとそういう事も忘れてしまう。

何もかもが、赤い。

「世界が終わる時つて、こんな感じかもしれないわね」

不意に隣から聞こえて来た言葉に、はっとなる。

見れば、一体いつの間にそこに来たのか、見知らぬ顔の女が一人、闇の気配の漂い始めた赤い光を浴びて立っていた。

「ね、あなたもそう思わない？」

尋ねながらもこちらを見ない横顔を、彼は答える事も出来ずに凝視した。

長い、背を覆う艶やかな黒髪。夕暮れの光に浮かび上がる顔は白

く、特に化粧をしている様子ではないのに、唇の赤が目にはつき付く。
「…誰だ？」

無意識に声に警戒が混じる。

ようやく女は彼の方に顔を向けると、ふ、と唇の端を軽く持ち上げた。

「聞いて、どうするの？」

尋ね返すその顔にやはり覚えはなく、彼は困惑する。

女はそんな彼の様子に軽く肩を竦めると、すつとさらに身を寄せてきた。そしてすぐに触れ合えそうな程の至近距離で、彼女はきっぱりと言い切る。

「安心して？ あたしとあなたは初対面だわ。今まで一度も会った事はないはずよ」

「……」

一体何を安心しろと言うのか。

困惑はさらに深まりはしたものの、少なくとも会ったのを忘れているという可能性が消えた事には安堵した。

何しろ目の前にいる女は、あまりに整った顔をしていたのだ。それこそ、一度会えば二度と忘れなさそうな。

美貌、というよりも、妖艶といった言葉がしっくりする顔立ち、そして雰囲気だった。けれども、不思議と色香を感じさせはしなくて。

そう、姿形はどう見ても『女』を強く意識させるものなのに、受ける印象はそうした甘さがない。

むしろ、どちらかと言うとそうしたものを否定する、潔癖さのよくなものを感じ取れた。

「ふふ……」

彼の困惑を見透かしたように、女は小さく笑い声を漏らす。まるで彼を困らせる事が最初からの目的のように。

「俺に、何か用があるのか？」

苛立ちを隠さず、率直に尋ねる。

すると女は、我が意を得たりとばかりに頷き。

「あなたの命を、貰いに來たの」

そう、言い切った。

「な…っ!？」

「これでも随分探し回ったのよ？ でもなかなか無自覚の者っていないから……」

「ま、待てよ。一体何の話だ！」

「何って…」

このまま流されてはならないと、焦りながら口を挟む。

すると女はそんな反抗など予想してなかったのか、その黒目がちの目をきょとんと見開いた。

そんな表情を見ると、外見よりも幼い印象を見る者に与えたが、彼には逆効果だった。不意に訪れた不可解な女に対して、怒りを抱く。

一体何だと言うのだろう、この女は。

命を貰いに來た？ 「冗談を言うのなら、もっとマシな事を言うべきだ。

「付き合いきれない、絡むんなら、他を当たれよ」

言い捨てて、ペダルに乗せた足に力を込めようとして。

「…!」

不意に首筋に這^はわされた冷たい指の感触に、思わず身を竦めた。

首を締めるといふよりは、正に『這わす』といった感じで、彼の首に女の指が絡んでいた。

このまま振り切る事も難しくはなさそうなのに、何故かそうする事が出来ない。まるで 蛇に睨まれた、蛙のように。

額や背中にじつとりと汗が浮かぶのを感じする。嫌な汗だった。

「逃がさない」

耳元で、甘く女が囁く。

「言ったでしょう。探し回ったのよ、ずっと…ずっとね。一族に属さない…しかもその血を継ぎながら、その事を自覚していない者は、

本当に数少ないの」

一族。

女がそう口にした瞬間、ぞくり、と戦慄が走った。

意味などわからないのに それが何を意味しているのか、知
っているような気がして。

自分というよりも、この身体を流れる血、そして身体を構成する
肉がそれを覚えているような気がして 。

「ごめんなさいね、でも仕方がないの。女は、子を産む。血を未来
へ繋ぐ その為には、力が必要な」

「……子？」

一瞬、何を言われたのかわからず、首を動かしてそこにある女の
顔をまじまじと見つめる。次いで、そんな徴候など見られない下腹
部に目を向けた。

その言い方では、まるで 。

彼の心を見透かしたのか、女はその視線の辿る先 腹部に手
を添えると、にこりと誇らしげに微笑んだ。

「まだ目立たないけれど、ここに、いるの。新しい、小さな命が」
その言葉に彼はようやく気付いた。

女から受ける印象が、外見とそぐわなく感じたその理由を。

彼女は今、『女』である以前に『母』なのだ。その強さも、潔さ
も、それ故に 。

「だから、あたしはこの命の為になら、どんな犠牲も厭いとわない」

言い切った言葉は、いつそ神々しさすら感じさせた。

けれど……だからと言って、それで納得するかというのは別の話だ。
彼は軽く頭を振ると、その場から逃げる事は諦め、再び女と対峙し
た。

「……どうして、俺なんだよ。どうして子供を産む為に、他人の命な
んかが必要になるんだ？」

そもそも疑問は、そこからだ。

すると女は笑みを収めると、自嘲するような口調で答えた。

「…知らない方がいいわよ。知れば、きっと困るのはあなたの方だもの」

「な!？」

「今までのような生活を送りたいと思うのなら、知るべきじゃないわ。知ればきつと、あなたは今の生活を失う事になる。…最悪、殺されるわ」

「…？　ちょっと待てよ。最悪、殺されるって…??」

最悪で殺されるというのなら、今の女に命を狙われているのはなんだと言っのだろう。

それよりもマシだと言っのだろうか？　意味は一緒のようにしか思えないと言っのに。

そんな彼の困惑に気付いたのか、女はくすり、と小さく笑い声を漏らした。

「ああ、そうだったわ。何も知らないんだから、『生命』の正しい在り方もわかってないのよね。もしかして、あたしに殺されるって思った？」

「え？　…違っ、のか？」

「違っわよ、全然。大違い。あたしは言っただしょ？　『あなたの命を貰いに来た』って」

「ああ…だからそれって、殺して命を奪っって意味じゃないのか？」

「とんでもないわ。殺したりしたら足がついちゃうじゃないの」

軽い口調で言い放っ言葉は、やけに空々しく聞こえた。

女の話を総合すると、どう考えても女がただの人間には思えない。先程のどんな犠牲も厭わな^{ちやうど}いと言っ様子では、殺人ですら躊躇^{ちゅうちよ}せずに行いそうだった。

なのに　それでも、罪を犯す事は恐れると言っのだろうか？　そんな彼の疑問に気付いたのか、女は笑みを収めると、仕方がないと言わ^んばかりの顔で説明を加えた。

「…この場合の『命』ってのは、言うならば『生命力』の事よ。実際にちよつと違うんだけど…まあ、それに近いわ。数日動けなくなったりするかもしれないけれど、回復する程度ね」

「……」

だったら最初からそう言え。

…と、咽喉元まで出かかったものの、寸で思い止まる。そんな事を言えば、彼女の言う、『命』を提供する事に同意するようなものだ。

「大丈夫よ。これまでにあたし、何度も命力を貰ってるからそれなりにコツを掴んでるし」

「そういう問題か!？」

「そういう問題よ。少なくとも…あなたにとってはね」

言いながら、女は再び身を寄せてくる。

反射的に後ずさりかけるのを、彼は意志の力で踏み留まった。

「…あたしに、いえ、あたしの子供に、あなたの命を頂戴」

真っ直ぐに向けられる真摯な視線。

目が、反らせない。

「あたしは、絶対にこの子を無事に産まなくてはならないの。喪う訳には行かないのよ…何が、あつても」

どうして、という疑問は口に出来なかった。

気付いた時には女の腕が首に回り、その赤い唇が彼のそれに重なっていた為だ。

ぎよつと目を見開いたのは一瞬の事。次の瞬間、まるで操り糸が切れた人形のように、全身の力が抜けた。

そして。

幕が下ろされたように、視界が闇一色に塗り潰された……。

+ + +

ずるり、と脱力した身体が崩れ落ちた。

それを抱き止めもせずに、彼女は先程とは打って変わった冷やかな目で、まだ少年と言っても過言ではない青年が地面に倒れ伏すのを見届ける。

「…ごちそうさま」

ぼつりと漏らした言葉にも、先程までであった親密さはない。

そのまま紅をつけずとも赤い、唇を手の甲で拭う。何度も、何度も。

…命力を奪うには、口付けるのが一番手っ取り早い。そして…もし、命力を完全に奪い去るのなら。

「やっぱり、全然足りないわね」

一人ごちる。

けれど、これ以上奪えばこの青年は死にはしなくても、植物人間になってしまう事だろう。

生命、とは魂と命力のどちらが欠けても正常に機能しないもの。

そして命力はある程度なら自分で回復するが、それ以上になると元通りには戻らない。

過去、何人か青年のような人間を廃人にしてきたからこそわかる
匙加減^{さじ}だった。

「…早く次を見つけないとね」

呟きながら、彼女はまだ膨らみのない下腹部を撫でる。

愛しそうに　そして、悲しげに。

（大丈夫よ、お前は絶対に守ってみせるから。お前は…あたしに残された、たった一つの　）

彼女は倒れた青年をそのままに、歩き始める。

いつの間にか太陽は地平に半分沈み、東の空は群青に染まりつつあった。

（…何度夜が来ても平気だわ。あたしは一人じゃないもの　）
そう思いながらも、夜になる事を恐れるように彼女の足は次第に速まる。

早く次の『餌』を見つけないければならなかった。彼女の内で育つ

命を産み落とすには、まだまだ力が足りない。

命力を根こそぎ奪う方法が取れないからこそ、急がなければならない。

一族に、見つからないように。見つければ、腹の子は必ず殺される。

それだけは許せない　だから一族でありながら、一族としての自覚のない者を狙うのだ。

（あの人に貰った『命』　奪われてなるものか……！）

思い出すのは、一番最初に命を奪った男の顔。

『お前になら殺されてもいいよ。…やるよ、命くらい』

そう言って笑った顔は、今でもまだ鮮やかに思い出せる。

生まれて初めて、本気で他人を好きになった。愛した、愛された。

でも　その結果、彼は死んでしまった。本当に彼女に、自分の命を全て与える事で。

あの時の絶望は、まだ心の奥底に沈んでいるけれど。

…子が宿ったと知った時、彼女は彼のいない世界で生き続ける決意をした。

残酷と呼びたければ呼べばいい。愛した男の命を糧に、名も知らぬ人々の『命』を奪い、涙も捨てて、生きて生きて、生き続けてやるのだ。

そしていつか生まれた子に、全てを与えて死のう。かつて愛した人が、自分にそうしてくれたように。

彼女は過去を振り切るように、しっかりと歩き出す。

燃えるような夕暮れの中…その炎のような赤を全身に浴びて。

やがてその背は、夕闇に溶けて消えた。

蠮螋（後書き）

実は何気に外伝だったりするらしい「かまきり蠮螋」です（マテ）

作中には一つも蠮螋なんて出てこないのになんでこのタイトルなのかは、ラストちょい前でわかった方もいらっしやるかと。

メスの蠮螋は、産卵前にオスを食べちゃうんですよ。

オスはメスの養分になって、メスはオスの命を貰って子孫を残す……ってイメージが『彼女』に重なったからです。

本篇に当たる物語のプロットは存在するのですが、今後書く予定がないのであえて固有名詞を避けております。

書いてみたい気持ちはあるのですが、現代を舞台にするといろいろ制約があって窮屈なのですよね……。

Invisible Moon (前篇)

その日。

そろそろ空が高くなり始めた秋の午後。

彼は何故か空を見上げてしまった。

「……」

見上げた空には、この頃久しく見なかった昼間の月。

薄く伸びた雲と同化しているような、そんな月を背景に。

「やあ、こんにちは」

彼の視線の延長上にいた黒尽くめの男は、ひょいと片手を持ち上げると、シニカルな笑みを口元に浮かべて、当たり前のように挨拶してきた。

「……はあ」

予想外の出来事を前にして、彼がそのリアクションが取れたただけでも上出来だと言えた。

どう反応していいものかもわからなかったので、そんな間抜けな生返事しか彼は出来なかった。　　と言うか。

ごく一般の人々の大半は彼と同じように反応するに違いなかった。本日は晴天なり。

気持ちいいくらいの晴れ渡った空。そこに散らばる雲はこじんまりとして、入道雲にはない可愛らしさだ。そして、惜しみなく降り注ぐ柔らかな陽光。

先日までの熱の名残を微かに止めた空気も、真夏の猛暑に曝された肌には心地良い、そんな天気だというのに。　　その人物がいるだけで、全てが場違いなものになってしまっていた。

いや、おそらくは場違いなのは男の方なのだ。

しかし、あんまり自然にそこにいるものだから、逆に周りに違和

感を感じてしまうのだろう。

空の青さと対比するような真っ黒な出で立ちも、随分と顔色の悪い顔も、そしてそこにある対処に困るフレンドリーな笑顔も、まだ序の口だった。

全ての違和感はまだ一点に集中していた。

つまり その男は、重力を無視して、宙に浮いていたのだ。

+ + +

「いやあ、長い事この稼業やっているけれど、ここまではつきりワタシを見た人間はアナタが初めてですよ」

にこやかに男は言い、馴れ馴れしく彼の肩をポンと叩く。

その足は相変わらず地についていない。

(…これって…『あなたの知らない世界』……?)

そんな季節はずれな事をぼんやりと思いながら、彼はまじまじと男を見つめた。

改めて見ると、男はそれほど奇抜な格好をしている訳ではなかった。

…いや、奇抜は奇抜なのかもしれないが、彼の知っている格好ではあった。

一般的な、ブラックフォーマル。もし男の足が地についてさえいれば、近所で葬式でもあったのかと思う服装である。

年齢はよくわからないが、二十代中頃といった感じで、彼より少し上といった様子だ。

少し目尻がつり上がった切れ長の目は髪と同様に黒く、日本人のようではあるが…その芝居がかった口調で何だか国籍不明だった。

当然ながら、顔馴染ではない。

「…あんた、誰だ？」

そこまで確認してから、彼はようやく口を開いた。

男はその言葉ににんまりと笑い、白い手をひらりと振って答える。

「人の名前を聞く時は、まず自分が先に名乗るものではないですか？」
三隅義孝ミスミヨシタカくん？」

「!？」

まさに自分の名前を告げられて、彼はぎょつとした。

こちらは相手を知らないのに、向こうはこちらを知っているなど当然思いもしていなかった。まさに不意打ちの言葉に咂然となる。

「何で……」

打ち上げられた魚よろしく、口をぱくぱくさせる義孝を、男はにやにやと人の悪い笑みを浮かべながら面白そうに眺め、当然のように言い放った。

「愚問ですねえ、その質問。ワタシのような職業の者に、そのような事を聞いてはイケマセンよ？」

「あ、あんた、何者だよ!？」

ばかにするような口調さえも気にならない。薄気味悪さが先に立ち、義孝は絶叫した。

その声に、周囲を歩く人々が驚いたように立ち止まり、いきなり大声をあげた彼をじろじろと見たが、それは義孝の視界には入っていない。

完全に自分の心の平安だけに気を取られている義孝を、男は苦笑混じりに宥める。

「はいはい。ちゃあんと答えますからねー。とりあえず、こんな往来で叫ぶもんじゃないですよ？ 他のヒトにはワタシは見えてないって事をわかってます？」

「!?!」

「取り合えず、この場から速やかに移動する事をワタシはオススメしますが、いかがです？」

くすくすと、小さく笑いを漏らしながら、男は覗き込むように忠告する。

今、自ら自身の異常さを明らかにした事で、義孝がどれほどショックを受けたのかわかっていないようだ。

強い眩暈めまいに襲われる。

『他のヒトには見えていない』

そんな事をさらりと言われて、はいそうですか、と納得出来るはずがなかった。

だが、男は未だ宙に浮いているし、この上なく場違いな格好をしているにも関わらず、誰の注目も受けていないのもまた、明らかな事実なのだ。

義孝は一度自分を落ち着かせるようにため息をつく、ぐったりと頷いた。

「わかったよ：近くの公園にでも行こうぜ」

すると、男はおや、といったような顔を見せ　しかしすぐに人を食ったような笑顔を貼り付けると、そうですねえと気軽に同意した。

+ + +

昼間の公園は街中であつて、ひどく長閑だった。

「いやいやいや、いいですねえ」

何がいいのか、日向ぼっこ中の老人を見て、男はにこにこ笑って言った。

義孝の怪訝そうな視線に気付いたのか、妙に真面目くさった口調で男は解説する。

「人生八十年とは言いますが、その人生で心身ともにリラックスして過ごせるのは人生の最初と終わりくらいですからねえ。しかもこの忙しいご時世じゃ、最後まで寛ぎなど知らずに終わる方も少なくないでしょう。あのご老人は、ある意味人生の醍醐味をきっちり味わっていらつしやるのですよ。スバラシイじゃないですか」

言われてみると確かにそんな気もしたが、何となく同意するのは

腹立たしくて、義孝は黙って老人に目を向けた。

そんな彼に、男は軽く肩を竦めたようだったが、それ以上は何も言わなかった。

「…それより」

「はい？」

「場所も変えた事だし、そろそろいいだろ。ちゃんと俺にわかるように説明してくれ」

「はあ…説明、ですか」

公園内にある時計はそろそろ15時を示そうとしている。

微かに傾いた太陽は相変わらず彼等を平等に照らしていたが

もしやと思つたら案の定、男の下にはあるべき影は見当たらない。

「お前、死人かよ？」

意を決して尋ねれば、男は鳩が豆鉄砲でも食らったような顔をした後、盛大に噴出した。

「あ…っははははははは！」

「なっ、何がおかしい！？」

「だ、だって…あまりに率直に尋ねてこられるものですから…くくく……」

「笑い過ぎだぞ。失礼な奴だな」

憤慨して言うと、ようやくにして男は笑いをおさめる。かなり爆笑したようなのに、その顔はやはり妙に血色が悪くて気味が悪かった。

「いや、申し訳ございません。そうですね、まずその質問にお答えしますと…まあ、当たらずとも遠からず、ですネ」

口元に笑みの名残を残しつつ、男はようやく説明する気になったようだった。若干神妙さを漂わせると、厳かに告げる。

「ワタシはあなた方の言葉にいたしますと…さしづめ、そう…『天使』といったところでしょうか」

「……」

「あ、なんです？ その疑いのマナザシはっ！」

「お前、それは天使とやらに失礼ってやつじゃねえの……？」

あまりに面の皮の厚い台詞に、それまで張り詰めていた緊張と毒気が抜ける。

なんだ、ただのばかか、と心の中で安心した瞬間、不意に義孝の額に冷たいものが触れた。

「！？」

「失礼はどっちですか。今、何を考えました？」

思いつきりにこやかな笑顔で尋ねられて、義孝の表情は引きつる。その事に構わず、義孝の額に突きつけた指をそのままに、男は言葉を重ねた。

「『天使』は『天使』でも　世の中にはですね、『告死天使』
というモノもいるのですよ？」

その瞬間。

義孝の視界は暗転した。

Invisible Moon（後篇）

見渡す限り、墓標が続く。

無機質な世界。

灰色の空。灰色の石碑。黒い大地。モノクロームが支配する、静寂の。

なんて淋しい場所なんだ。

心の中まで吹き込むような、冷たい風を感じてそう思う。

そこには生きているものは何一つない。

そう　そこは「死」のみが存在する世界だ。役目を終えて、永久の床に就く、魂達の終の場所。

誰かが訪れる事もなく、誰かが花を手向ける事もない。せめて切花であつても、花があれば違うだろうに。

「随分と、優しい事を考えるんですね」

声がかけられる。けれどその事に驚きも違和感もない。

そう…ここは　『彼』の世界だ。

「ここを見て、そんな事を考えたのはアナタが初めてですよ」
苦笑混じりの言葉。

「大抵の人間は…恐怖感しか持たないハズなのですが」

確かに恐怖も感じはする。生きている人間でまったく「死」を怖れない者なんて実際にいるんだろうか、とも思う。

けれど　それとは別に、そんな「死」と常に向き合わねばならない存在は気の毒だとも思うのだ。

「気の毒…ですか。本当に貴方という人は何から何まで変わった人ですねえ」

彼は、心底呆れたように呟く。

でも…気のせいだろうか？

その言葉に、ほんの微かながら笑みが滲んでいるようなのは……。

+ + +

「…あれ？」

気がつくと、目前で広がっていた光景は掻き消え、先程までの閑な昼下がりの公園へと戻っている。

反射的に男の姿を捜すと、彼は先程と同じ位置に浮いていた。その事に少し安堵して、義孝はため息をついた。

「どうしました？」

にやにやと笑いながら、男はそんな義孝を覗き込んできた。何だかちよつと小ばかにした様子に、むつとなる。

「…何でもねえよ」

こんな奴に少しでも同情したのは無駄だった。そんな風に思った時、男は不意に真面目な顔つきで口を開いた。

「義孝くん。一つ忠告いたしましょう」

「あ？ ……何だよ、改まって」

またしても考えた事を見透かされたのかと身構えると、男は全く予想外の事を言い放った。

「アナタにワタシの姿がここまではずきり見えている以上、アナタにはそういう類のものを視る能力があるという事です。どうやら自覚はしていないようですが…ワタシのレベルまで視るという事は、今後…まあ、有体に言いますと、妙なものを視る事になると思いますよ。心した方がいいでしょう」

「…はあ？ 妙な、もの……？」

「ええ。俗っぽく言いますと…いわゆる霊などを」

「何だって!？」

ぎよつとなる義孝に、男はいたって真面目な調子のままで頷く。

「先程お見せしたヴィジョン アナタはまったく正確にその本質を見抜きました。あそこは普通の人間ではワタシ同様、見る事も叶わないものです。つまり…それだけアナタの力は強いという事に

……」

「ちょっと待て!? そ、それってどういう事だよ? 先刻のは、お前が見せたから見えたんじゃないのかよ!？」

思わず男の言葉を遮って叫ぶと、男は困ったように肩を竦めた。何処となく道化師を思わせるそんな動作とは裏腹の、妙に同情的な視線が義孝の不安を煽る。

「ワタシも、まさかここまで強い力を持っているとは思いませんでしたからね」。大抵のヒトはまともなヴィジョンを見る事も出来ずに、ただ恐怖でパニックに陥るのが関の山なのですよ、実際。あそこまで視る事が出来て 尚且つ、ワタシのような者に同情するオヒトヨシなんて、気の遠くなる程生きてきましたが初めてでしたよ」

「べ、べつに同情した訳じゃ……っ」

「そうなんですか? 結構嬉しかったので、お礼にアナタの寿命でもお教えしようかと思ったのですが」

「そんなもの聞かせるなよ!」

男の言葉を反射的に遮って、義孝は頭痛がしてきた頭を抱えた。何をどうすればそんな事がお礼になると思うのか。先の知れた人生なんて、怖い以外の何物でもない。

一瞬、男の思考回路を疑ったが、ふと目を上げその表情を見た途端、からかわれたのだと気付く。

「まあ、冗談はともかくとして……」

「ちよつと待て、今の何処から何処までが冗談だったんだ」

「……そんなに怖い顔しなくても……。大丈夫ですよ、寿命なんておいそれと口にできるわけがないでしょう」

「……まさか、そこだけなのか……。? 変なものとかがいうのは……」

「あ、それは本当ですよ。嫌ですねえ、信じてなかったんですか?」

「当たり前だ!」

「そんなに嫌がらなくても。宝くじ並みの高確率ですよ? 取りあえず喜んで……」

「喜べるか、ボケエツ!!」

すっかり血圧の上がった義孝は、そこまで叫ぶとぐったりと肩を落とした。

何が宝くじ並みの高確率だ。それなら本物の宝くじに当選させて欲しい。何が悲しくて、見たくもない妙なものを見なければならぬのか……。

一気に鬱状態に陥った義孝を、男は困った顔で見下ろした。

「…霊なんて、実在しないって思ってたんだぞ、俺は」

ぼつりと漏らすと、男は労わるような口調でそうですか、と言った。

「そう思っているヒトはたくさんいますね。でも…本当は見えないだけで、いつでも何処にでもいるんですよ 昼間の月のように」

「……」

「だから、霊とかそういう類は見る…つまり存在を認めてもらえる者がいると、近寄ってくるんです。そういう存在は彼らにとっては太陽のようなモノですからね」

「死人の太陽かよ」

「…初めから、気付かなければ一番いいんですが。知ってますか？ ヒトの目は都合のよいものしか映さないんですよ。アナタはたまに、見なくてもいい全てを見るような目になってしまっただけです」

それはやっぱり宝くじというよりも貧乏くじのような気がしたが、先程までの激昂はもう起こらなかった。

一つだけ、気付いたからだ。

「…ひょっとして、最初にあんたを視たのは幸運なのか？」

男はその言葉には答えなかった。ただ曖昧に微笑むだけで。

でもよくよく考えれば、この男と今のうちに会話など出来なかったら、心構えもなしに妙なものを視る羽目に陥ったかもしれない。

「きつとそうだな…悪い、一方的に怒鳴って」

「ふ…やっぱりアナタは変わり者だ」

小さく笑みを漏らして、男は褒めているのかけなしているのかわからないような事を言う。

そして何かを思いついたように、ふむ、と頷くと、男はにっこりと義孝に笑いかけた。

「そうですね……ここで会ったのも何かの縁です。本当にどうしようもなくなったら、ワタシを呼ぶといいでしょう。助けてあげますよ」

「へ？」

思いがけない言葉に義孝が目を丸くすると、男はにやりと笑った。そしてそのまま、不意に上空へと浮かび上がる。

「お、おい？」

「スミマセンね、義孝くん。これでもワタシは結構多忙な身でして今日はこの辺で失礼しますよ。……また機会があったらお会いしましょう。その時は再会を祝して、百万本の薔薇ならぬ百万本の菊の花でも持参しましょうか」

「ちよ、ちよつと待てよ!？」

「では……せいぜい清く正しく生きてくださいね」

「待てつて、おい……!？」

一方的に別れを告げると、ひらひらと手を振りながら、男はそのまま颯爽と去っていく。あまりに突然の事で、義孝は呆氣に取られた。

「待てつて……マジで。聞けよな、おい」

怒りどころか、それを通り越してばかりになる。

「助けるってんなら……名前くらい名乗っていけよな……」

これではどうやって呼べばいいのかわかりやしない。だが、心の何処かで彼をどう呼んだとしても、向こうはわかるような氣もした。まあ、相手は（自称）『天使』さまなのだし。多少、その辺の融通はきくだろう。

これからどうなるというのかわからないが、ひよっとしたらこれはこれで毎日が楽しいものになる……かもしれない。

それがあくまでも希望的観測に過ぎないである可能性もあるが、義孝はあえてその可能性を無視した。

何事も前向きに考えた方がいいに決まっている。本当に困った事が起こったなら、あの男が助けてくれるのだろうから。

百万本の菊、というのは勘弁して欲しいが。

苦笑して、義孝は歩き出した。

男が消えた秋空には、薄く消えかかった昼間の月が浮んでいた。

Invisible Moon（後篇）（後書き）

この『目に見えない月（和訳）』という話は、そもそも友人との共同管理サイトに掲載していたものでして、一応は『秋』をテーマにした作品でした。

一応、とつくのは見てわかるとおり、作中で秋だぞーとは書いてあるものの、それだけだからです……（オイ）

書いた当初は現代、というだけでバックボーンとか何一つ考えていなかったのですが、そこからいろいろと設定などを考えている内に、『妖幻抄』との関連もちろはら出来てきたので、一緒にしてしまう事にしました。

そついう経緯から、こちらはちょっと他とは毛色が違うのですが、お楽しみ頂けたのであれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4597m/>

妖幻抄

2010年10月8日14時13分発行